

コメント フェミニズムと子育て支援

大森 順子

こんにちは。これまでお話しされた方は、皆さん、研究者でしたが、私は研究者ではなく、アクティビスト、さまざまな活動に携わってきた者です。ですから自分の活動を背景にして、3人の方のお話から感じたこと、考えたこと、私が話したいことをお話しして、それをコメントにさせていただきます。

まず、私が何者かについて、簡単にご紹介いたします。公益社団法人「子ども情報研究センター」という民間団体の事務局で働いています。「子ども情報研究センター」は子どもの人権を基本として、さまざまな子育て支援関係の事業をしています。例えばお母さんの子育ての相談に乗ったり、学校におけるハラスメントやいじめの問題に対応したり、親が子どもを連れて集う「つどいの広場」を運営したり、『はらっぱ』という月刊誌の編集もやっています。私は事務局におりまして、主に『はらっぱ』の編集に携わっています。

「子ども情報研究センター」は私の職場ですが、その活動と別に、1980年代から私は母子家庭の当事者の活動をずっと続けております。私自身も離婚した母子家庭です。といっても、今は孫もおりますからシングルマザーというのも何なんです……。2013年からは「女性のための離婚相談まえむきIPPO」という場をつくり、今でも母子家庭のご相談を受けたりしています。そういった背景がありますので、それらの活動をもとにして3人のお話から示唆されたことにコメントさせていただきたいと思います。

フェミニズムと反貧困運動

1番目に「フェミニズムと反貧困運動」についてです。何人もの方がおっしゃったように、母子家庭といったら、イコール、貧困です。申さんのコメントにもあったように、私たちは昔からずっと貧困なんです。反貧困運動というものができて、反貧困という言葉が社会的に認知されて、私たちの貧困もちょっとだけスポットライトを浴びました。ただ、それは伊田さんもおっしゃっていたように、男性たちが貧困になってきたことによって、これまでの女性たちの貧困もやっと見えてきたわけです。

* 公益社団法人子ども情報研究センター事務局員、女性のための離婚相談「まえむきIPPO」主宰。これまでの主な活動として、NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ・関西、ふえみん大阪など。

反貧困運動のネットワークをつくって、男性の反貧困運動の活動をされている方たちと一緒に、母子家庭の活動をしていたメンバーも活動するようになりました。湯浅さんがおっしゃっていた年越し派遣村がありましたが、大阪でも年越し相談会を大々的にやりました。ニュースでご覧になった方も、大勢おられるかと思います。

ただ年越し相談会に、やはり女性の相談は非常に少なかった。その理由はニュースを見ていただくと一目瞭然で、あんなところに女性はなかなか相談に行けないよね、というのがはっきりわかります。男の人ばかりがたくさんいるわけですから。そこにテントを張って私たちが「働く女性の人権センターいこ☆る」の方たちと一緒にブースを持ちました。もちろんブースを持つ前に話し合いの中で、「女の人が来るのなら表に顔が出ないような裏から通れる道をつくる」とか、「テントの前に目隠しみたいにして、顔が見えないようにする」とか。そういうことをいっぱい提案させてもらって、そういうことはできていました。

だけれども、母子家庭の方は、今や100%近く、DVの被害を受けています。男の人がたくさんいるところには、とうてい行けないんですね。男性のところに行くというだけで気持ちが萎えます。そこで相談をするというのは大変なことで、来てくれる方はすごく少なかったのですが、それでも大阪はまだ多かったらしいです。そういった現実の中で「女性の相談はえらく少なかったね」と男性たちから言われましたが、「いやいや、それにはいろいろな事情、背景がある」という話をさせてもらいました。

それから大阪では、日雇い労働者たちが集まる「釜ヶ崎」という町があります。そこで反貧困運動をずっと続けておられる男性の方たちと、私たちも一緒に活動していこうということで、何度か学習会を持たせていただきました。そこである男性活動家の方が、「究極の貧困はホームレスである。このホームレスを何とかしなければいけない」とおっしゃった。もちろんホームレスはすごく大きな問題です。でもそれに続けて、「女性のホームレスって、ほとんどいませんよね」という話になりました。その当時でも女性のホームレスはおられたし、実は母子のホームレスも問題になっていました。でも確かに数は非常に少ない。

でもそれは、なぜ？ということです。そのときは、女性たちの間からものすごく反発が出ました。女性がホームレスになるというのは、どういう意味なのか。ましてや母子家庭であれば、子どもを連れてホームレスになれますか？ 子どもがいますから、それは考えられないし、女性1人であったとしても、ホームレスになったときに、どんなに安全が脅かされるかということは、私たちには容易に考えられるわけです。「大勢の男たちからレイプされるくらいなら、とりあえず1人の男をパートナーのようにして、その1人からレイプされ続けるほうがましだわ」と言う人もいたぐらいでした。実際ホームレスの中には、カップルとして暮らしている女性がいました。もちろんその人たちが全部、そういう考えというわけではありませんが。反貧困運動をしている男性たちの言動に、非常に憤りを覚えたわけです。

それと冗談として言いましたが、私がもしホームレスになるとしたら、たぶん男性としてホームレス生活をしたいと思います。女に思われたい、男の格好をして暮らすので、きっと男にカウントされてるので、そんな人が結構いるんじゃないか、という話です。「ホームレスにもなれない女性たち」という問題です。

そのときに感じたのは、「反貧困」という統一した非常に大きな問題があり、母子家庭はずっと昔から反貧困だったにもかかわらず、男たちと一緒に運動していくのが本当に難しいということでした。それをすぐにわかってもらえると思っていたのが甘かったかもしれませんが、女が生きる現実みたいなものに対する想像力が男たちにないことに対して、とてもつらく、がっかりした感覚を持った体験でした。

母子家庭とフェミニズム運動

次に、母子家庭とフェミニズム運動についてお話します。私も母子家庭の活動をずっとしてきましたが、母子家庭は貧困の真っ只中にいるため、当事者として活動することはすごく大変なことです。当たり前ですけど、毎日仕事もしなければいけないし、子育てもしなければいけないし、それで活動もするわけです。それでも何とかやってきていたのですが、正直言って今の時代に、私たちより若いシングルマザーの方が活動に参加することは不可能に近いです。おそらく私たちより若い人が活動するなんてことは、もうないのではないかと。

40代ぐらいのシングルマザーと一緒に活動していましたが、あまりにも日々がしんどすぎて、メンタルな面で自分を保ってられないといったケースがありました。この方は非常にしっかりしていて、頭も良くて、団体の活動の講師としても務められるような人でしたが、「彼氏にふられた」とか、ちょっとしたことでガンと落ち込んでオーバードーズしてしまう。そういった経験が何度もありました。運動の継承の難しさを感じます。

生活のあまりのしんどさのなかで、どのような気持ちになるかという、「DVの男とは別れたけれど、もう一度、別の男と結婚したら、もしかして今よりは楽になるのではないか」という思いです。「前の男が悪かっただけで、別の男だったらいけるのではないか」とか、やっと逃げてきたのに、お金がなくなって、子どもの養育費の支払いが滞っているから別れた夫に連絡して「養育費を払って」と言ったために、またつきまとわれるようになったとか、そういったケースもありました。つまり、根本にあるのは、女性がひとりで子どもを育てながら生きていくことの難しさです。そこに「結婚したら何とかなるんじゃないか」という家族主義みたいなものがすぐに入り込んでしまう。シングルマザーとして生きるうえでの危うさ、危なさを、非常に感じてきました。

申さんのコメントにもあったように、シングルマザーはずっと貧困でしたが、年を取るとまさに悲惨です。年金はまともに掛けていませんし、貯金もないですから、シングルマザーは自分の老後がどういう状況になるかは考えたくない。みんな考えないようにして、何とか毎日を暮らしている現状です。だからどうしても「男」にすぎるといふ誘惑がちらついてしまう。

女性の貧困をどう解決するか。当然、男女同一賃金にするとか、差別をなくすために非正規ではなく正規雇用を進めるとか、いろいろな対策がとられて、仮に、男女の差別がまったくない社会ができたとしても、シングルマザーには子どももいるわけですし、シングルインカムです。今の社会の政策は「家族」が基本になっていますから、男女のダブルインカムと比べたら、どんなに平等になったとしても、所得は半分しかなく、しかも、子どもの分の生活費も必要です。

それゆえ、女性の貧困を解決するためには、当然ですが、まずは子どもにかかる費用はすべて無

償化すべきです。どんなに貧しい家庭の子どもであっても、どんなに大金持ちの家庭の子どもであっても同じように、教育費、住居、食費、医療費も何もかも、無料とすべきです。そうしない限りは、本当の意味での貧困は解消されないと思います。やはり家族という単位を解体して、個人単位にならない限りは、本当の意味で平等はない、女性が生きられる社会にはならないと思います。

フェミニズムと子育て支援

そうした個人単位にしたときに「子ども」をどのように考えるのか。私は子ども情報研究センターにいますから、子育ては私にとっては非常に大きな問題なわけです。日々小さい子どもさんを育てているお母さんたちと接して、いろいろなお話を聞いています。

今、すごく子育てがしんどいです。湯澤さんの報告で、自己責任とされる問題提起がありました。自己責任論があまりに強すぎます。親なら子どもをちゃんと育てるべき、といった考え方です。「親が」というのは結局「母親が」という意味です。子どもの安全も何もかも、それこそ子どもの貧困に関しても、母親がちゃんとすべきだというプレッシャーが非常に強く、そして良い母をずっと演じ続けて、最後に崩壊してしまうケースがたくさんあります。

児童虐待の問題にも、活動の中で関わっております。いま児童虐待防止法ができて、通告義務が課せられるようになりました。通告義務自体の是非はいろいろあると思いますが、ひとつ言えるのは、ほとんどの母親が「虐待と言われたらどうしよう」という不安を抱えるようになったことは確かです。ともかく「虐待」と名指しされないように、窓を閉めきって、子どもが泣いたらどうしよう、口を塞がなくなっちゃ、というほどに、周囲の目におびえながら、孤立した環境のなかで、ともかく通報されないように子育てをしているという現実があります。

一方、虐待の中でも最近ものすごく増えていると言われているのがネグレクト（養育放棄）です。私は、ネグレクトの概念自体が、良い母を想定した上で、母親を苦しめているのではないかと思います。いったいどこまでがネグレクトなのか、誰がネグレクトだと決めるのか。例えば、私は母子家庭でしたから、子どもはけっこう放ったらかして育ててきたわけです。私が子育てをしていた当時はそんな言葉はなかったですから、何とかありましたけれど。朝ご飯がないとき、子どもに「ポッキーでも何でも食べて行き」みたいな感じで、かつては誰でもそのくらいあったと思いますが、今だったら「ネグレクト違う？」と言われかねない。

母子家庭で夜のお仕事をされているお母さんが子どもを預ける場所がなくて、子どもを家に置いて仕事に行く。これは私の住んでいた団地で本当にあったのですが、その間、たまたま子どもさんがベランダに出て泣いていました。そしたらすぐ通報されて、お母さんは「ネグレクト」です。お仕事に行ってたんですよ。母子家庭は働けと言われて、働いたらネグレクトと呼ばれる。そのケースが最終的にどうなったかという、生活保護を受けるようになって、お母さんは今おうちにいます。私は、それって何か違うんじゃないかと思います。せっかくお母さんはがんばって働いて、夜、お仕事をされていたのに、それがネグレクトとみなされてしまう。

ネグレクトとは誰が決めるのかという、ネグレクトという概念自体が持っている母性主義みたいなものに対して非常に疑問を感じます。そして、それによって良い母親像をさらにお母さんたちに

押し付けることになるのではないか。同じく虐待に関して、個々のお宅から通報があったりした場合、虐待のアセスメントをケースワーカーさんがされるのですが、そのアセスメントの中にも、やはり母性主義が非常に潜んでいるのではないかと思っています。

一方で、子育て支援の現場の中で、保育士さん、幼稚園の先生、「つどいの広場」のスタッフさんたちなど、そういった子育て支援に関わっている人たち自身が、実は、非常に根強い家族主義意識をもっている。「やはりお母さんが本当は3歳までおうちでみてあげたほうがいい」と思っている人が少なくありません。それが理想だと思っているけれど、実際できない人たちがいる。母子家庭だし、大変だから。働きに行っている、できないから。仕方がないから。私たちがその分、支援をしているんです、という意識です。

そういった意識で子育て支援をやっているのが、おそらく、いまの主流です。保育園の保育士さんでもそうです。子どもを保育園にお迎えに行き、保育園に入ろうと思ったら会社からメールが来た。メールを見ていたら保育園の園長先生に、「お母さん、そんなメールなんか後でもいいじゃない。早く息子さん、見てあげて。お母さんの顔を見るのが子どもが一番うれしいのよ」などと言われるわけです。

そうなんですか？ それは違うんじゃないの？ と私は思います。保育園では保育園での子どもの幸せな時間があり、家庭では家庭の幸せな時間がある。それで十分だろうと私は思うのですが、家族が一番、母親が子どもにとって最も大切なんだという、子育て支援の中の家族主義が、女性を苦しめます。

フェミニストは子育てを語らない

最後に、今日のコメントで最も言いたいこと「フェミニストは子育てを語らない」という問題です。湯澤さんの報告のなかでも、フェミニズムの中で、子育てがどう位置づけられているかといった話がありました。もちろん、ある程度は語ってきたと思います。私たちの年代のちょっと先輩たちは、「共同子育て」ということで、子育ての社会化を目指し、女だけが子育てをするのではなく男にも子育てをさせる、そして自分だけが自分の子どもを見るのではなく、みんなで共同で子育てをしようよ、といった運動の実践もありました。

だけど、それは続かなかった。そのあと、そういう運動もなくなりました。私が思うには、きっとあの運動のなかで「そうはいつでも、やはり自分の子どもが、何か特別にかわいい」という思いがあったのだと思います。それをどのようにその運動の中に位置づけるか、自分の思想の中に位置づけるかということを、フェミニストはきちんとやってこなかったのではないかと思います。

対「男」との関係の中では、この男だけと関係をしっかりと持ちたい、ということの意味を考えたと思います。そして、それでいいのかと問い直したと思います。しかし対「子ども」に関して、自分の思いを突き詰めて考えてきたかどうか。

フェミニストにとって、自分の子どものこと、子育てを語ることは、いわゆるNGワードであり、言うてはいけないことのような感覚があったように思います。しかし今は、子育てを社会化しないと、もうどうしようもないのです。「子どもの貧困」もそうですけれど、子どもたちはものすごく

大変な状況の中で生きているわけです。親ももちろん大変です。その大変な親に「がんばって子どもを何とかしなさい」と言っても、それはもう無理だと私は思っています。みんなで子育てするしかないんですね。

「みんなで子育て」というのはスローガンのように語られますが、それは本当にどのような意味なのか。一人ひとりが自分の子どもだけではなく、いま目の前に生きている子どもを、みんなで子育てをするということはどういうことか。子どもを産まない人、子どもを持っていない人たちが、どのように子育て支援に関わっていけばいいのか。その問題をフェミニストは突き詰めて考えるべきです。実際、子育て支援の現場は、子どものいる人か、私のようにかつて子育てをした人が主流ですが、これからは子どものいない人をどのようにコミットさせていくかということが非常に大事なことだと思っています。

3人の方へのコメントというよりも、自分の言いたいことばかり語ってしまいました。ありがとうございました。(拍手)

法政大学大原社会問題研究所 ワーキング・ペーパー（旧調査研究報告）のご案内

ワーキング・ペーパーは、教育研究機関からのお申し込みに限り、無料で配布しております。
個人・一般の方には実費で頒布しています。入手ご希望の方・機関はご連絡ください。

No.	タイトル	発行年月
53	最新刊 持続可能な地域における社会政策策定にむけての事例研究 Vol.4 倉敷市政と繊維産業調査および環境再生・まちづくり調査報告— (500円)	2015年3月
52	持続可能な地域における社会政策策定にむけての事例研究 Vol.3 倉敷地域調査および桐生繊維産業調査報告— (500円)	2014年4月
51	棚橋小虎日記 (昭和十八年) (500円)	2014年1月
50	持続可能な地域における社会政策策定にむけての事例研究 Vol.2 繊維産業調査および公害病認定患者等調査報告— (500円)	2013年4月
49	電産中国関係資料 (300円)	2013年3月
48	協調会の企業調査資料 (300円)	2012年4月

法政大学大原社会問題研究所 〒194-0298 東京都町田市相原町 4342
tel:042-783-2305 fax:042-783-2311 e-mail oharains@adm.hosei.ac.jp